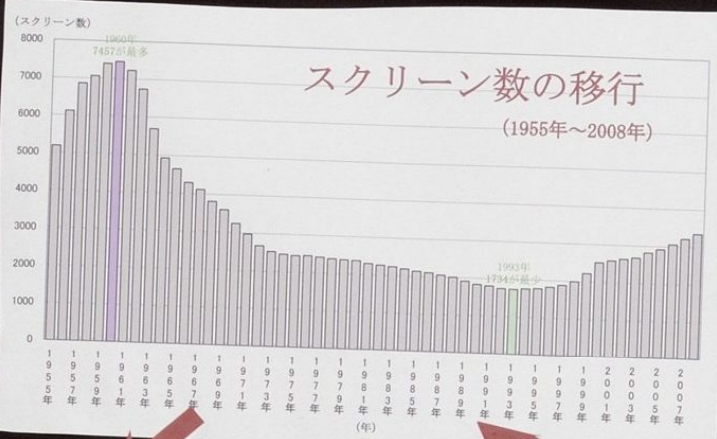


日本映画業界の移り変わり

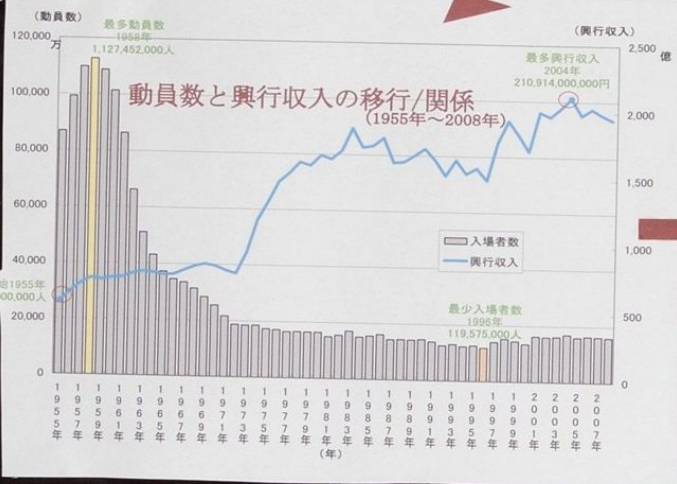
戦後は映画の人気の徐々にながっていき、動員数に比例してスクリーン数も非常に高かった。70年代から急激に減少していくが、近年はショッピングモールなどに併設型の映画館「シネコン」が全国で多く開館され、スクリーン数も増えつつある。今後も増えるだろう。

スクリーンが減少しているので映画を観る人も同様に減少しているが、反対に興行収入が上がっているのは何故？

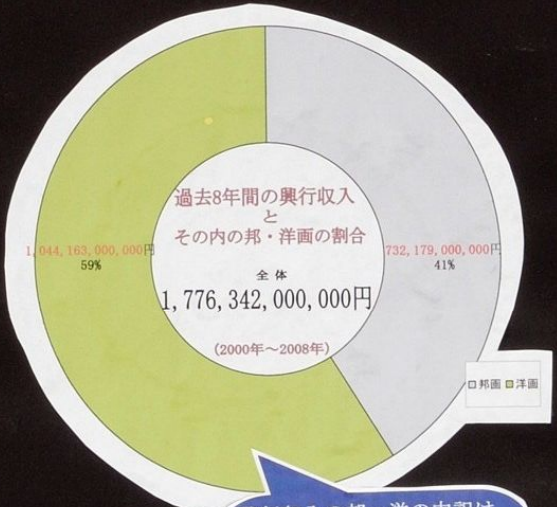
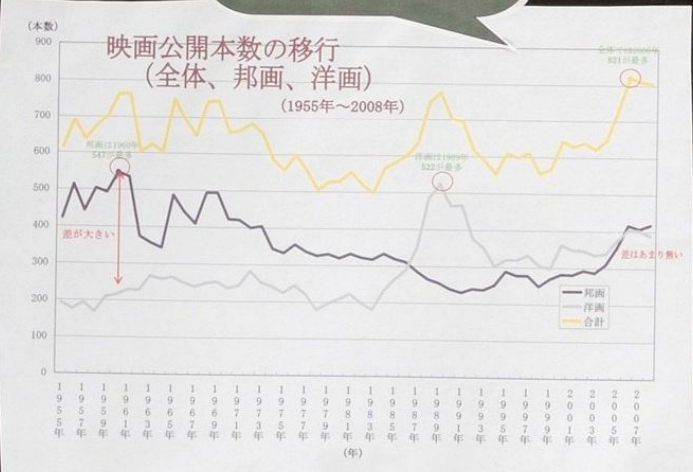


料金の変動を見ると動員数の減少とは反対に興行収入が上がっている理由がわかる。動員数が少なくても1人あたりの料金が高いので、料金が低かった動員数最多の50年代よりも収入が多い。

50~70年代の料金はほぼ1000円以下と、現代の料金に比べると非常に低い。しかしその間も年々料金は高くなり、変化が激しかったことがわかる。近年はあまり変動が無く落ち着いているが、やはり統計初期に比べるとかなりの高額だ。



全体の公開本数はやや増減があるが統計初期と比べてもあまり大きな差は無い。しかし初期は邦画が非常に多く邦・洋の差が開いていたが、ここ数年はほぼ同じ本数が公開されている。しかし80年代後期には一度洋画が邦画を大きく越している。



興行収入の邦・洋の内訳は2000年から詳しく出ている。近年はあまり差が無いとはいえ、全体的に見るとやはり邦画は洋画に押され気味だ。外国文化が国内に多く入ってきていることがわかる。